

第35回北とぴあ若手落語家競演会 大賞受賞！ 笑福亭希光さん インタビュー

2024年8月25日（日）北とぴあつつじホールにて、「第35回北とぴあ若手落語家競演会」が開催されました。出演された六名がそれぞれに個性的な高座を披露。観客投票の結果、笑福亭希光さんが北とぴあ大賞に選ばれました。

まずは、北とぴあ大賞を受賞された率直な感想をお聞かせください。

ホッとしています。二ツ目時代に一回だけチャレンジできるというのは、ほかの選手権にはあまりないと思います。僕達若手の中でも、名の知れた大会だから、「(あの人)北とぴあ取ったんや！」と話題になることがあります。一度しかないって大変だなと思います。緊張感は結構大きくて、やっと解放された気分です。

——他の会とは異なる緊張感があったのですね。

チャンス1というのは、人生においても中々ないですからね（笑）

受験でしたら浪人という選択肢もありますが、一度きりというのはかなりのプレッシャーがありました。



▲受賞直後の笑福亭希光さん

今後はどのような落語を披露していきたいですか。

僕の場合はシンプルです。

上手い噺家さんや、こだわりのある噺家さんのスタイルは僕には難しいので、そういったものは上手な人にお任せして、僕は来ていただいたお客さんに「笑顔で帰っていただく」ことだけを一番にしています。

今後の展望をお聞かせください。

(落語は)少数の業界だが伝統もある、不思議な世界だと思います。ベールに包まれていて、落語を知らない人も多い。落語の存在、座布団の上で何かするという事は知っていても、内容に関して突っ込んでくる方は少ない印象です。

1人でも多くの人に聞いてもらいたい。そして、「落語って面白い！」と思ってもらいたい。これを実現するために活動していきたいです。

希光さんで自身が「落語って面白い！」と思った瞬間はどんな時でしたか。

もともと、吉本新喜劇で芸人をやっていました。新喜劇は団体で活動しますが、落語は個人で多くの人々を表現します。この点に魅力を感じました。一つの舞台上で色々な人々の「気持ち」を想像しなくてはいけないのは、落語の他にはないと思います。

また、劇は役をいただいて表現をしますが、落語は自分で噺を選びます。与えられるのではなく、自分で選択し自分だけで表現する、とても裁量の多い表現だと思います。

本日の楽屋はどのような雰囲気でしたか？

とても良い雰囲気でした。ほぼみんな同期の様な感じで、協会が違くとも、よく顔を合わせてきたメンバーでした。ピリピリ感がなさすぎてビックリしました！

最後に、一言お願いします。

歴史のある競演会で大賞をいただき、大変ありがたい気持ちでいっぱいです。

共に出場した落語家たちは、みな異なるスタイルで臨んでいて、彼ら彼女らと横並びで競い合うことに不思議な気持ちを抱きました。そうした環境だったこともあり、傾向等を意識せず、自分らしい落語を目一杯披露することが出来ました。



▲演目『紀州』を披露する笑福亭希光さん。高い集中力とユーモラスな表情で、観客を笑いの渦に巻き込んでいく。

第35回北とぴあ若手落語家競演会 2024年8月25日（日）14時開演
【出演】柳亭市童、林家あんに、春風一刀
古今亭今いち、桂伸べえ、笑福亭希光（口演順）
【ゲスト】林家彦いち【司会】米粒写経